レジーナ・カルマ～if2～

第７話 if：最愛の人を信じて（陽花里視点）

書斎での悍ましい「魂の転移」を終え、広間へと戻ってきた陽花里（中身大河？？）。理人のカラダに滑り込んだ陽花里。そんな彼女の前で、陽花里（中身大河？？が、フッと鼻で笑いながらロを開く。

陽花里（中身大河？？）：「何もおかしなことはなかったわよ。」

その時、理人（中身陽花里）が小さく息を呑んだ。陽花里がロにした「あたしたち」という一人称。フッと鼻で笑う仕草は、奔放なギャルである陽花里の癖そのものだった。

陽花里：（大河…あたしのフリをして、あたしを魔女から護るために必死に演技してくれてるんだ…！？あたしも理人のこの脳とカラダを使って、絶対に大河を護り抜く！！）

やがて、トイレから戻らない大河を心配して、３人は、館の中を歩き回ることにした。廊下に座り込む大河のカラダを発見した、まさにその時だった。理人（中身陽花里）は、隣を歩く陽花里（中身大河？？）が大河を見つめる冷酷な視線に、恋人としての圧倒的な肉体的違和感を抱いた。

陽花里：（あたしのカラダに入っているのは、大河のはず…あたしのためにあたしのフリをして魔女から護ってくれてる…でも何かおかしい…どうして自分の元のカラダをそんな冷たい視線で見つめるの？？それに大河もぴくりとも動かないなんて…）

理人（中身陽花里）：「ねえ、大河。疲れてるなら、あたしが―僕が看てあげるよ？」

理人（中身陽花里）は、しなやかな動作で大河の背後へと滑り込むようにカラダを密着させた。男同士のカラダが不穏に擦れ合う。しかし、大河は、微動だにしない。その時、陽花里（中身大河？？）も大河のカラダに近づこうとしたが、それよりも早く、理人（中身陽花里）の引き締まった大きな手のひらが、電光石火の速さで陽花里（中身大河？？）のおしりへと伸び、容赦なく、深く、ガチリと鷲掴みにしたのだ！

陽花里（中身大河？？）：「ひゃあッ…！？何をするの、理人…あ、あふぅッ！？ 💕」

陽花里（中身大河？？）から脳髄を直接灼かれたような艶めかしい嬌声が弾けた。衣服越しに肉を抉るように揉まれながらも、陽花里（中身大河？？）は、不敵に唇を歪めた。

陽花里（中身大河？？）：「何をするの？理人…あたしを襲うなんて…あたしのカラダに乗り移ろうっていうの？でも…ん…まだまだね…このくらいであたしは逝かないわよ！」

衣服越しに肉を抉るように揉まれても、陽花里（中身大河？？）は、執念で圧倒的な精神力で耐えてみせた。

第８話 if：救いの手（陽花里視点）

　しかし、このことが理人（中身陽花里）が違和感を確信に変えるきっかけとなっていた。

陽花里：（あたしに乗り移ってるのが本当に大河なら…こんなに快感に耐えられる？？あたしのカラダのツボは、あたしが一番良く知っているのよ！いくら大河でも女の…あたしのカラダになっちゃえば、あっという間に蕩けてしまうはずなのに…！…待って…男じゃないとしたら…）

　理知的な理人の脳を得た陽花里と女の直感が融合し、違和感は、疑惑へと変化する。

陽花里：（あたしのカラダに乗り移っているのが女だとしたら…快感に耐えられんじゃない？琴葉は、初心だろうし…まさか…魔女…！…でもそう考えると、筋が通る…）

陽花里（中身大河？？）：「どうしたの？理人？さっきから考えこんでいて…」

　陽花里（中身大河？？）が怪訝そうに理人（中身陽花里）をのぞき込む。

陽花里：（やっぱり…おかしい…どうしても大河じゃない気がする…でも確信が持てない…もし、あたしのカラダにいるのが魔女だと宣言して違っていたら…理人のカラダにいるのがあたしだと、どこかのカラダにいる魔女が逆宣言してくるかもしれない…そうすれば…あたしの魂は消滅する…どうすれば…理人ならどうするの？）

　その時だった。琴葉のカラダがぴくんと反応して声を漏らした。

琴葉：「ひゃうんっ…！？」

陽花里：（誰かが琴葉に乗り移った？もしかして魔女なの？？）

　やがて琴葉の顔に本人のものとは思えない強い意志が宿った。

琴葉（中身？？）：「理人！いや、理人の中にいる君が、そのカラダに定住すると宣言するんだ！そうすれば、君の疑惑はすべて晴れる。失敗したとしてもノーリスクだ！」

理人（中身陽花里）：「琴葉…ちゃん？君は何かを…」

琴葉（中身？？）：「今は説明している暇はない！わたしを信じるんだ！」

陽花里（中身大河？？）：「理人…そんなことできないわよね。」

　陽花里（中身大河？？）のその言葉を、理人（中身陽花里）が見逃すはずがなかった。しかし、理人（中身陽花里）は、少し俯いた後、最高に明るい表情となって、虚空を見つめ、誰かに呼び掛けるように宣言した。

理人（中身陽花里）：「あたしは…陽花里！そしてあたしは理人のカラダに定住する！」

陽花里（中身大河？？）：「な…何を言っているの？陽花里はあたしよ！そんな無意味なこと言ったって…」

第９話 if：救いの手（陽花里視点）

理人（中身陽花里）：「あなたはさっき、あたしにそんなことはできない、と言った…でもあたしが理人だと思うなら、できないではなくて、無駄だというはずよ！」

陽花里（中身大河？？）：「そんな言葉尻を捉えて屁理屈をいうなんて…理人らしくないわよ…」

必死で取り繕う陽花里（中身大河？？）だったが、理人のカラダに定住した陽花里に迷いはもうなかった。

理人（中身陽花里）：「悪あがきはここまでよ！魔女！よくも大河のフリをしてあたしを騙してくれたわね！許さないんだから！さあ…消滅しなさい！」

陽花里（中身魔女）：「ふ…ふふ…まさか…陽花里…あなたがわたしの正体に気付くなんてね…油断したわ…理人の脳を使って知力を得たのかしら…」

魔女は、ついに正体を現した。しかし…魔女の魂が消滅する気配はない。

理人（中身陽花里）：「どうして？正体を見破ったのにどうして魂が消滅しないの？？」

陽花里（中身魔女）：「わたしは魔女であって…魔女ではない…そういうことよ。」

琴葉（中身？？）：「なるほどね…本名を言わないと消滅しないってことか…」

琴葉（中身？？）が冷静に魔女の言ったことを分析する。

陽花里（中身魔女）：「ふ～ん…その物言い…琴葉のカラダに入っている君は…」

琴葉（中身理人）：「おっと…それ以上は言わせないよ。僕は理人だ。そして僕は、琴葉さんのカラダに定住する！」

陽花里（中身魔女）：「く…君たち…簡単に他人のカラダに定住するなんて…奪われる人の気持ちを考えてないの！？」

陽花里（中身魔女）が美しい顔を歪めて悔しがる。理人が琴葉のカラダを定住ロックしたことで、魔女の逃げ道は狭まった。

琴葉（中身理人）：「お前からそんな言葉が出てくるなんて笑わせるな。僕は、僕のカラダを陽花里に託した。そして、僕が琴葉さんのカラダに定住することも琴葉さんなら理解してくれていると信じている。」

琴葉（中身理人）は、上空に漂う琴葉の魂に語り掛けるように言い放った。その言葉に琴葉の魂は、幸福に満たされていた。

理人（中身陽花里）：「やっぱり！理人だったのね…さっき琴葉に乗り移っていたのは！」

第９話 if：愛の証（陽花里視点）

　理人（中身陽花里）の顔がぱあっと明るくなる。

陽花里（中身魔女）：「理人…君がそんな冷酷な選択をするなんてね…いいの？あなたが琴葉のカラダを奪ったことで琴葉は、別のカラダに…いえ…もしかしたらどのカラダに入れないかもしれないのよ？」

　陽花里（中身魔女）は、普段の陽花里が見せないような必死な形相で理人（中身陽花里）と琴葉（中身理人）を睨みつけて脅迫する。

陽花里（中身魔女）：「それにわたしの名前をあなたたちが知らない限り、わたしの魂を消滅させることはできない。わたしの魂をこのカラダから追い出そうとしても、陽花里、このカラダの持ち主であるあなたでさえもできなかった。チェックメイトよ！！」

理人（中身陽花里）：「…ふふ…」

琴葉（中身理人）：「…はは…」

陽花里（中身魔女）：「何がおかしいの！絶望で気が狂ったのかしら？」

　笑いを止めない二人を陽花里（中身魔女）は、イラつきながら見下して言った。

琴葉（中身理人）：「…君は大事なことを忘れているよ…」

理人（中身陽花里）：「…そうね…」

　理人（中身陽花里）は、理人の低く涼やかな声を震わせながら、狂おしいほどの愛を込めて叫んだ。

理人（中身陽花里）：「大河！！聴こえてるんでしょう！？ どこにいるのよ！―お願い、そこにいるなら、今すぐ自分のカラダに戻って！！」

　陽花里の涙ながらの悲痛な懇願が、空中を彷徨っていた「大河の本来の魂」の胸を激しく撃ち抜いた。迷っていた大河の心に再び揺るぎない勇気が宿った。

大河：（陽花里…！わかったよ！俺のカラダは、琴葉にあげようかとも思って待機していたんだが、何か考えがあるんだな。琴葉、ごめん。俺は元のカラダに戻る！だが、お前のことは必ず俺が助ける！どんなことをしてもな！）

　大河のその言葉に幽体となっていた琴葉も笑顔で頷く。大河は、大いなる決意を胸に秘めて自分のカラダへと戻って来た。

大河：「ただいま。陽花里。」

理人（中身陽花里）：「おかえりなさい…大河！」

陽花里（中身魔女）：「何を今更…大河が戻って来たからって何ができるっていうの？」

第 10 話 if：愛の証（陽花里視点）

大河：「陽花里。俺はどうすればいい？」

理人（中身陽花里）：「お願い大河、あたしの、魔女が乗り移っているあたしのおしりを揉んで感じさせて！」

大河：「いや…お前でさえできなかったのに…俺ができる訳が…」

大河もさすがに自信がなさそうだ。

理人（中身陽花里）：「大丈夫よ。あなたはあたし以上にあたしのことを良く知っている。それにあなたができないなら、あたしも…諦めることができるわ…」

理人（中身陽花里）のその一途な想いに大河も腹を括った。

大河：「わかった…だが、俺がそれをすると、俺がお前のカラダを奪うことに…」

理人（中身陽花里）は、大河の言葉に無言で微笑み返した。大河もその意味を理解したようだった。大河は、目の前にいる自分の最愛の恋人―陽花里のおしりを、衣服の上から容赦なく、深く、ガチリと鷲掴みにした！

陽花里（中身魔女）：「ひゃあんッ…あ、あぁぁんっ…💕」

陽花里（中身魔女）のおしりが、大河の容赦ない刺激によって、一気に快感を与えられる。。先ほど理人（中身陽花里）のタッチを耐えきった魔女だったが、大河の放つ圧倒的な愛と、陽花里のカラダを知り尽くした愛撫の前に、その絶対防御は脆くも崩れ去った。脳髄を直接灼くような甘美な快感が全身を駆け抜ける。

陽花里（中身魔女）：「ああっ、そこは、だめぇッ…💕」

大河：「よくも陽花里のカラダを弄んでくれたな！」

陽花里（中身：魔女）：「く…大河…男のお前がどうして…っ、こんなテクニックを…本人の陽花里よりも…ああぁッ！ダメ…感じて…しまう💕」

強烈な絶頂の濁流に呑み込まれた瞬間、ルール①が発動した。大河の魂が陽花里のカラダへと乗り移り、代わりに押し出された魔女の魂は、玉突きのように大河のカラダへと強制的に押し戻された！

陽花里（中身大河）：「うっ…うおっ…！陽花里のカラダに入れたぞ！すっごく柔らかくて、それに快感の余韻が残っている…」

先ほどまで魔女によって妖艶な色香で振舞っていた陽花里が大河の魂が乗り移ることで豪放的な、そしてガサツな所作に変わって自分のカラダを確かめ、快感の残滓を噛みしめていた。

第 11 話 if：無敵の定住カウンター

理人（中身陽花里）のもとへ、陽花里（中身大河）が駆け寄る。見た目は、「理人と陽花里」が逆転したビジュアル。陽花里のカラダ（中身：大河）は、理人（中身：陽花里）の手をギュッと力強く握りしめた。

陽花里（中身大河）：「陽花里！俺だ、大河だ！無事にお前のカラダに入ったぞ！」
理人（中身陽花里）：「大河…っ！よかった、あたしになってくれたんだね…！」

理人（中身陽花里）は、女の子のカラダになった大河を抱き寄せ、その広い男の胸で包み込んだ。大河のカラダに入った魔女は、激しい焦燥に顔を歪める。

大河の魂が陽花里のカラダに避難したことで、形勢は一気に逆転した。陽花里は、大河が陽花里のカラダに入ったことで、ルール⑤の「定住」のピースが完璧に揃ったことを確信していた。

理人（中身陽花里）：「大河、お願い…あたしのカラダに永久定住するって宣言して！あたしのカラダは…あなたにあげる！」
陽花里（中身大河）：「おう！俺は、陽花里のカラダに永久に定住する！！」

これで３人の器はロックされた。理人（中身陽花里）は、目の前の大河（中身魔女）を冷徹に指差した。

理人（中身陽花里）：「これであなたはあたしたちを消滅させられない！」

大河（中身魔女）は、焦燥に顔を歪めながら叫ぶ。

大河（中身魔女）：「な…何なのよ…この迷いのない連携は…自分のカラダを簡単に捨てて、他人として生きることの意味がわからないの？…まあいいわ、それなら、わたしはこのままこの【大河のカラダに定…】」

魔女が大河のカラダで定住を言い切れば、彼女の現世復活が確定してしまう。その瞬間、空中を彷徨っていた【琴葉の魂】が、大河のカラダを魔女から奪い返そうと、決死の覚悟で背後から飛び込んだ！

大河（中身魔女）：「フン、無駄よ！この動きは予測してたわ―シールド！」

ドゴォン！ と精神の衝撃波が走り、大河の肉体に近づこうとした琴葉の魂が、魔女の張ったシールドによって激しく弾き飛ばされた。本編で陽花里を絶望させた、あの絶対防御の壁だ。

第 12 話 if：一度見た技は通じない！

大河（中身魔女）：「あはははは！誰も私に近づけないわ！今度こそ、わたしはこの大河のカラダに定住を―」
理人（中身陽花里）：「調子に乗ってんじゃないわよ！―あなたのそのシールド、もう見切ってるんだから！」

魔女が定住を言い切るより早く、理人（中身陽花里）が動いた。理人（中身陽花里）は、魔女のシールドの「一度に一方向にしか張れない」という仕様と、魔力波形を本能的に見抜いていた。
理人（中身陽花里）：「一度見た技は通じない！常識よ！」

理人（中身陽花里）は、しなやかなステップで、魔女が前方の琴葉（幽体）にシールドを割いている真後ろ―完全な死角へと滑り込んだ。理人（中身陽花里）は、大河（中身魔女）のおしりを、後ろから容赦なく、深く、抉るように激しく揉みしだいた！
大河（中身魔女）：「ひゃあッ…！？な、何をするの、陽花里…そんなことをしてもわたしは、大河のカラダからは弾きだされないわよ…あ、あふぅッ！？」

理人（中身陽花里）：「そんなことはわかってる…だから目的は、あなたの気を逸らすことなのよ…」
衣服を限界まで無視して食い込む、陽花里の柔らかくも確かな手のひら。大河の本来のカラダが持つ「一番エロく開発された快感の記憶」が脳髄を直接灼き、魔女の精神集中は完全に途切れ、張っていたシールドがガラスのように粉々に砕け散った！
大河（中身魔女）：「そんなわたしのシールドがこんなことで破られるなんて…ああっ、そこは、だめぇッ…カラダが、蕩けちゃう…っ！」

快感で魔女が完全に無防備になったその刹那、弾き飛ばされていた琴葉の魂が、シールドの隙間から大河のカラダへと猛然と飛び込んだ！魔女の魂が弾きだされ、空に舞う。
舞夜：（琴葉？お前が…大河のカラダを選ぶなんて…いいの？お前が理人を想っているのは、知っているわ。あなたが望むなら、もう一度あたしがそのカラダに乗り移って、別の女性のカラダを用意してあげることだって…）

しかし、大河のカラダを手に入れた琴葉は、ハッと目を見開くと、魔女が立て直す隙を一切与えず、大河の低い声で力強く叫んだ。
大河（中身琴葉）：「いえ…わたしは、この【大河のカラダに永久に定住する】！！わたしは、男として、大河くんとして、女の子になった理人くんをエスコートするの💕」
舞夜：（く…何故誰もわたしを理解してくれないの…）

最終話：ふたりだけの新しい愛の形

――ゴォォォ……ッ！

館のシステムが完全にロックされ、大河の肉体は琴葉の魂で完全に固定された。空中へと弾き飛ばされた魔女の魂は、激しい焦燥の中で現世のカラダへ戻ろうと手を伸ばす。しかし、周囲を見渡した瞬間、魔女舞夜は、絶望に顔を歪めた。

舞夜：（ああ…これではわたしはまた一人…ここでまた…ずっと…一人）

こうして誰も消滅することなく洋館に夜明けが訪れた。嵐が去り、目映い太陽の光が山道を照らす中、サークルの４人は誰も消滅することなく洋館を後にしていた。陽花里は理人のカラダに、大河は陽花里のカラダに、理人は琴葉のカラダに、そして琴葉は大河のカラダに…それぞれが永久定住を選び、奇妙にねじれながらも完璧にクローズした、４人だけの新しい愛の形。

陽花里（中身大河）：「ははは、俺が陽花里のこのカラダで豪快な動きをしたから、魔女も予測できなかったようだな。」

理人（中身陽花里）：「もーー、あの時の大河のおしり揉み、我ながらマジで最高に男前だったわ。」

そんな二人の後ろでは、男らしく大きな体となった大河（中身：琴葉）が、可憐な少女の姿をした琴葉（中身理人）を逞しい腕で引き寄せ、そのふくよかなおしりを、人目を盗んでジーンズの上から優しく愛おしそうに揉みしだいていた。

琴葉（中身理人）：「ん…っ…だ、ダメだよ。琴葉、大河たちの前だよ…あ、あん💕」

大河（中身琴葉）：「ふふ、いいじゃない、理人くん。わたしの、いえ、もうあなたのカラダだったわね、触られるのがこんなに大好きなんだから。これからも、毎日たくさん可愛がってあげるね💕」

全員の精神がねじれつつも、誰一人欠けることなく絆を証明した世界。空中を彷徨う舞夜の幽体が、羨ましさと孤独でキーキーと悔しそうに泣き叫ぶ声を遠くに聞きながら、４人の足取りは軽く、不思議なほどに誰よりも深く、淫らで、臨機応変な最高のハッピーエンドへと歩み出していくのだった。